HCニューズレター

No.14

Human Care News Letter

2013年2月 日本ヒューマン・ケア心理学会

ケアする人のケアを考える

日本ヒューマン・ケア心理学会第14回大会を終えて

筑波大学人間総合科学研究科　小玉 正博

日本ヒューマン・ケア心理学会第14回大会は、会参加者は115名（会員、非会員40名）を得て、2012年7月15日と16日の2日間、筑波大学東京キャンパス文京校舎において開催されました。本大会では、昨年の東日本大震災とそれに引き続く福島原発事故などから、被災者のみならずそのケア提供者自身もまた被災者であったりすることを踏まえて、ケア行為の相方向性という視点から「ケアする人のケアを考える」をテーマとしました。

初日の学術集会のシンポジウムでは、大会事務局長（中村恵子先生）の司会のもと、大会テーマ「つながりあう〝ケア〟のうち「ケアの相補性―人が支援し、支援される構造―」というテーマを巡って、伊藤尚子先生（日本赤十字看護大学）からは災害看護学の立場、志賀令明先生（福島県立医科大学看護学部）からはご自身が被災者でありながらケア提供者であるという立場、高田薫先生（元航空会社勤務）からはご自身ががん治療中の立場でありながら同時に家族の闘病によりケアする立場でもあるということを踏まえて、それぞれ本テーマについて話題提供と討論を掘り下げていただきました。指定討論者として松井豊先生（筑波大学大学院人間総合科学研究科）からは災害ストレスおよび悲嘆研究の観点からの質疑とコメントをいただきました。さらに、研究発表の部門では、口頭発表13件、ポスター発表37件の合計50件の発表があり、その内容は、病気と健康の問題、ストレス、ポジティブ心理学的介入、大人と子ども、産業・児童養護・教育場面など、本学会らしい多領域の多彩な方法論による研究が発表されました。また、本大会では、東海林渉先生（東北大学）による口頭発表「食事療法における糖尿病者と配偶者の取り組みに関する定性的研究」、石村郁夫先生（東京成徳大学）によるポスター発表「自己への思いやりの態度がうつ症状を軽減させる効果に関する研究」がそれぞれ優秀発表賞として表彰されました。

2日目午前の研修会では、堀越勝先生（国立精神・神経医療研究センター・認知行動療法センター）による「認知行動療法の最前線」という題名でご講義いただき、50名の参加者からは大変好評を得ました。また、午後の大会講演では、参加者120名（うち一般参加者69名）を前に、ノンフィクション作家の柳田邦男先生から「物語を生きる―人間とケアの意味」というテーマでご講演をいただきました。とりわけ、福島原発事故調査委員としてのお立場からの貴重なご報告には参加者一同深い感銘を受けました。2日間とも天気に恵まれ、成功裏に終えることが出来ましたが、これもひとえに、会員の皆様の絶大なご協力の賜と心より感謝申し上げます。



新しい筑波大学文京校舎（大会会場）

大会講演

「物語を生きる―人間とケアの意味」

ノンフィクション作家　柳田　邦男

日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会第14回大会の二日目、「物語を生きる―人間とケアの意味」というテーマで柳田邦男先生にご講演いただきました。先生と聴衆にとって少なからず心地よい時間と空間であったことが、20分超過でお話しして下さったことや、その後のサイン会、雑談の様子などから伺えました。

先生は、長年、人が如何に生きているか、それも如何に心を立て直しながら生きているかということについて一貫して取り組んでこられました。こうした中、東日本大震災が発生し、スケールの点でも、被災形態の点でもかつてない事態が生じました。そこで津波や原発事故で大切な人、家族、家、故郷を失った方々の辛い思いについて触れ、「生き直す」ことの意義に言及されました。大切な人が死ぬと、その人と同じ日々を生きた自分の心の中でもう一つの死が生じますが、そこから新しく生まれ変わることが「生き直す」ことです。心の中の死に直面した人を支援する場合、「生き直す」という支援を導入すると問題の見え方も変わるだろうと先生は指摘されました。

次に、辛い試練に遭遇した人々は、人生の物語の文脈を作り上げることで生き直す力を獲得していくというお話がありました。文脈作りは書くことで成され、これが大きな意味を持つとのことです。日々の出来事のようなエピソードをいくつか書いた時、それぞれのエピソードを結びつける行為が文脈作りになります。この文脈作りは、自分が生きている人生の物語の一部を書くという営みにほかなりません。自分の置かれている状況を客観的に見直すことで、そこから新しい時間が始まり、新しい人生を開くことになるというのです。

最後に、先生はケアについて話されました。一つひとつのエピソードはちょっとした小さな行為の積み重ねで作られます。ケアの行為の中で出てくる言葉は一つひとつの小さなもののつながりであるかもしれないし、断片であるかもしれません。しかし、それはやがてクライアントの人生の文脈の中で突然意味を持って浮かび上がることも少なくありません。これが「物語を生きる人間」に対するケアの意味であると結んでいただきました。

以上、「ケアする人のケアを考える」という大会テーマを締めくくるにふさわしい講演となりました。

（大会事務局　小倉泰憲）



大会講演　柳田邦男先生

第14回シンポジウム

「ケアの相補性 ―人が支援し、支援される構造―」

本シンポジウムは右記テーマで大会1日目の午後2時から5時まで開催されました。まず日赤看護大学の伊藤尚子先生が東日本大震災での岩手・宮城での急性期の被災者のケアの実態とそこでのご苦労、今後の改善対策などについてお話をされました。次に福島医科大学の志賀令明（筆者）が、自らも東電第一原発事故の間接的な被災者であることも含め、慢性期に至った避難者たちの心身の問題について話しました。最後に乳がんを患い、同時にご家族がやはり脳転移した乳がんをお持ちである高田薫先生（元航空会社勤務）が、がんを持ちながらご家族のケアに当たる際のご苦労についてお話しされました。最後に指定討論者である筑波大学大学院の松井豊先生から、それぞれの発表者に対して「いかに悲しみに向かい合うか」についてのコメントがあり、それに基づいて質疑応答が繰り広げられました。

あっという間の3時間で、このような濃密な時間はヒューマン・ケアを単に職業としてだけではなく、生き様として選択している人々が集まったこの学会だからこそ持てたのだなと、日本ヒューマン・ケア心理学会の存在の理由と意義を強く感じました。

（福島医大看護学部　志賀令明）



シンポジウムの様子

研修会参加者の感想

「認知行動療法の最前線」

研修会は、大会2日目の午前中に行われました。国立精神・神経医療センターの堀越勝先生より、認知行動療法の実施には人間関係における基本的なコミュニケーションスキルが不可欠であること、認知や行動の問題の根底には感情があることから、感情をどのように受け入れ、適応的な認知行動様式を本人なりに獲得するよう支援していくことがポイントであることなど、ユーモアを交えてわかりやすく講演していただきました。クライアントのプロトコルから感情、認知、行動身体症状のどこに問題が生じているのかをアセスメントする実習もあり、より主体的に取り組むことができたと思います。最新のトレンドとして、統一プロトコルや、アルコール依存の問題や睡眠、ＩＢＳなど身体症状にアプローチする認知行動療法の有効性が挙げられ、


研修会の一コマ

ボリュームのある、非常に充実した2時間でした。

研修会に参加して、コミュニケーションスキルや感情がいかに大切かということについて改めて認識できました。また、他の療法との比較をしながら認知行動療法のポイントを講義していただき、これまでバラバラであった知識をつなげることができ、認知行動療法の理解が深まったように思います。この研修会で得た様々な気づきや学びを今後に生かしていきたいと思います。

駒沢あさみ（東京成徳大学大学院）

第14回大会優秀発表賞（口頭部門）を受賞して

東北大学大学院教育学研究科　東海林　渉

この度、口頭発表部門における優秀発表賞をいただけましたこと、誠に欣快に存じます。この場を借りて、共同発表者の安保英勇先生と、本大会事務局の先生方、担当理事の先生方、私の拙い発表をご清聴いただき、たくさんのご意見をくださいました先生方、そして、調査にご協力いただきました方々に、深く感謝申し上げます。

このような賞をいただくのは私自身、はじめての経験で、受賞に際しては、大変な驚きと喜びが私の中で行き交い、胸が高鳴っておりました。

今回、「食事療法における糖尿病者と配偶者の取り組みに関する定性的研究」として発表させていただきました内容は、システム理論を軸に、食事療法に取り組む夫婦の特徴を考え、夫婦間に生じやすい問題構造を検討し、夫婦をどのように支援できるか考察したものでした。かねてより私個人の思いとして、糖尿病の食事療法の支援では「糖尿病者を支援する家族の支援」を考えていかねばならないと感じておりましたので、今大会のテーマ（「ケアする人のケアを考える」）は、私のそうした思いをより一層強め、この考えに対する確信と発表の勇気を与えてくれるものでした。今回、このテーマのもとで受賞できましたことが、私にとって、何よりも意義深いものとなりました。


東海林渉先生

今後も、今回の受賞に安んずることなく、当事者と当事者を囲む家族、そして現場で働く医療従事者の方々に有意義な研究を行っていきたいと思います。ありがとうございました。

第14回大会優秀発表賞（ポスター部門）を受賞して

東京成徳大学応用心理学部　石村　郁夫

このたび、第14回大会にてポスター発表部門で優秀発表賞を賜りまして、大変光栄に思っております。審査をして頂いた先生方、共同で研究をして頂いた先生方、ならびに研究協力して頂いた皆様に心よりお礼申し上げます。

本研究で取り上げた自己への思いやりとは、厳しい自己批判をしたり、苦痛を伴う思考や感情を過度に浸ったり、その苦しみを回避・否認するのではなく、「自分に対して思いやりを持ち、その苦しみを緩和したいという心構え」と定義されています（Neff, 2003）。今回の研究発表は、介入群の大学生24名に対して1ヵ月に渡って毎日5個、自分を褒める自己肯定的・共感的な考えを書き留める自己肯定課題を実施し、自己への思いやりの態度を育成することで大学生におけるうつ症状や反芻を改善させる介入法の有効性を検証するものでした。その結果、介入群では自己への思いやりの態度が育成されることでうつ症状が有意に軽減されることが示されました。また、思考様式としてはうつ状態の危険因子である反芻が抑制され、適度に気分転換できるようになり、問題解決策を探ろうとし、困難状況における対処力が増して将来に対する希望を見出せるようになる等より建設的な考え方に変容することが分かりました。


石村郁夫先生

今後は、臨床実践で幅広く活用されるために、うつ状態で悩む方々の心理的支援の一助として提案できるように効果検証や実施上の工夫を重ねたいと考えています。

名誉会員のご紹介

飯田澄美子先生は本学会の設立発起人であり、1～4期まで理事・監事としてご活躍され、看護分野と教育・心理学分野を繋ぐ貴重な存在として広く社会と本学会に貢献されたことに感謝して名誉会員として承認されました。専門は、基礎看護学で認定カウンセラースーパーバイザー（2007-）、交流分析士認定研修スーパーバイザー（2009-）。1930年生まれで、1952年聖路加女子専門学校、1956年日本社会事業学校専攻科を卒業、2011年3月（80歳）迄聖隷クリストファー看護大学教授を歴任された。1988-1989文部科学省学術審議会専門委員他、学会評議員、理事、監事など多数歴任。1997日本カウンセリング学会より功労賞、2003社会文化功労賞、2007日本公衆衛生学会名誉会員、2008看護科学学会名誉会員他、表彰多数。主著は『看護カウンセリング』。

日本ヒューマン・ケア心理学会 第15回大会のお知らせ
〈死別後もつづく絆〉

日程：２０１３年７月６日(土)・７日(日)

会場：聖路加看護大学

大会テーマ：「死別後もつづく絆」

会長講演　堀内成子(聖路加看護大学 教授・聖路加産科クリニック 副所長)
「死別後もつづく絆：天使の保護者ルカの会の活動から」

教育講演　Nigel P. Field(Pacific Graduate School of Psychology)
"Continuing Bonds in Bereavement: An Attachment Theory Based Perspective"

特別講演　細谷亮太(聖路加国際病院　小児総合医療センター長)
「愛しい人を失うとき」

研修会　麻原きよみ(聖路加看護大学地域看護学　教授)
「エスノグラフィー：データ収集および分析方法の実際」

プログラムは、一般口演・ポスター発表のほか、セルフヘルプグループとの交流セッションの企画をしています。

今後のスケジュール

1. 演題申込み(抄録原稿提出締切)　締切　２０１３年５月７日(火)
2. 事前参加申込　締切　２０１３年６月20日(木)

事務連絡先：
〒１０４－００４４　東京都中央区明石町10－１　聖路加看護大学
「日本ヒューマン・ケア心理学会」学術集会第15回大会事務局
電話・ＦＡＸ　０３－５５６５－１６２６(大学代表)
大会専用アドレス　jhc15@slcn.ac.jp
大会ＨＰ　http://www.jhc15.jp/

※原則として連絡は専用メールアドレスにお願いいたします。メールを使用できる環境にない場合のみ、ＦＡＸをお使いください。

第15回 大会準備委員会委員長：堀内成子(聖路加看護大学 教授、聖路加産科クリニック 副所長)

お知らせ

本学の研修委員会では、看護学や心理学領域をはじめとする各種認定資格等の研修ポイントも検討中です。会員の皆様方におかれましては、ふるってご参加ください。

(研修担当　長田久雄)

「ヒューマン・ケア研究」投稿論文募集

執筆要領が新しくなりました。ＨＰにも、また機関誌13－2にも掲載いたしましたように、執筆要領が改訂されました。とくにご注意いただきたいのは、①論文の種類として、短報(short report)が追加されたこと(英文アブストラクトは不要、お気軽にご投稿ください)②英文アブストラクトについて校閲の証明書を提出すること(Homepageからダウンロードできます)の2点です。どうぞご注意ください。

(編集担当　遠藤公久)

Web担当からのお知らせ

現在、会員向けに限定したサービスとして「ヒューマン・ケア研究」に掲載されている原著論文(２０００－２０１１ No.1)がＷｅｂからダウンロードできるようになっております。ご利用下の際には以下のＩＤとパスワードを入力する必要があります。なお、パスワードは、会員以外にはお知らせにならないで下さい。

ＩＤ　：HCkaiin2013　パスワード　：RYJZIUQF

なお、このＩＤ及びパスワードは、２０１３年４月１日より有効となります。それまでは前年度のＩＤ及びパスワードをお使い下さい。

(Ｗｅｂ担当　岩崎祥一)

広報委員会からのお知らせ

昨年６月より本学会の広報メールの運用を開始しております。自著紹介や研究会のお知らせなど、会員への情報配信のご希望の際は、member@j-hc.jp(広報メール事務局)あてに、タイトルを「メール配信希望」として、記事のタイトルと本文をお送りください。現在までの発行が、僅か1号といささか寂しい状況です。奮ってのご活用お願いいたします。また、メールが届いていない方、メールアドレスが変更となられた方も、右記アドレスまでご一報ください。

なお、このアドレスは広報用となります。入退会・住所変更・会費についてのお問い合わせ等、学会事務に掛かる事項は、従来通り学会事務局での取扱いになりますのでご留意ください。

(広報担当　安保英勇)

編集後記

今年度は記念すべき第15回大会です。第１回目の開催校であった聖路加看護大学に戻ります。会員の皆様には１号通信が、すでにお手元に届いたかと思います。外国人講師の招聘をはじめとして、魅力あふれる新しい企画がいっぱいです。会員の皆様方におかれましては、ぜひとも、ご参加・ご発表くださいますよう、お願い申し上げます。

(広報担当　廣瀬清人)

●学会へのお問い合わせ(学会事務局)、学会誌投稿等のお問い合わせ(学会誌編集事務局)は、それぞれ次のとおりです。

●学会事務局
〒761－0793　香川県木田郡三木町池戸1750－1　香川大学医学部
清水研究室気付　日本ヒューマン・ケア心理学会事務局
humanpsy@med.kagawa-u.ac.jp　TEL&FAX／087－891－2240

●学会誌編集事務局
〒150－0012　東京都渋谷区広尾4－1－13　日本赤十字看護大学看護学部
遠藤研究室気付　日本ヒューマン・ケア心理学会編集事務局
humancarepsy@redcross.ac.jp　TEL&FAX／03－3409－0914